

広げよう！
子育ての輪

赤ちゃんのふれあいに
絵本をどんどん！

「赤ちゃんといふれあうきっかけの一つに、絵本を取り入れてみませんか？」
高島市では、まだお話をすることのできない赤ちゃんと、おうちの方との心のふれあいに、絵本がひとつのきっかけになればと、生後4か月と1歳のお子さんを対象に絵本を贈る、「ブックスタート」事業に取り組んでいます。



1歳

赤ちゃんには体の成長と同じように心の成長も欠かせません。最近は「子どもたちの心を動かす体験が少ない」と言われています。リズムのある言葉、色鮮やかな絵でできた絵本は、「次はどうなるのかな」「これは何だろう」と感じる気持ちを育み、心を動かします。また、赤ちゃんは優しく語りかける声やぬくもりをとおして、「自分は大切にされている」ということを感じています。これは赤ちゃんの心の安定と成長にとっても大切なことです。



4か月

会場では、図書館職員がブックスタート事業についてのお話をした後、絵本リストなどが入った「ブックスタートバック」と絵本を1冊プレゼントしています。「どれがいいかな」「また、おうちで読もうね」など、楽しそうに絵本を選ばれる様子を見ながら、親子の時間がより楽しいものになることを願っています。

会場では、図書館職員がブックスタート事業についてのお話をした後、絵本リストなどが入った「ブックスタートバック」と絵本を1冊プレゼントしています。「どれがいいかな」「また、おうちで読もうね」など、楽しそうに絵本を選ばれる様子を見ながら、親子の時間がより楽しいものになることを願っています。

子育ての
子どおと
いい話

ひとりじめなこども



私は4歳の息子と2歳の娘をもつ母親です。上の子が保育園へ行き始めた頃は、慣れない環境、母と離れる淋しさ、今まで我慢させてきたのが爆発した時期がありました。ある友人が「保育園に行きたがらないのはママがそれだけ好きってこと。我慢が爆発したのが、今でよかつたな。そのまま我慢をためて大人にならなくてよかつたね」と言ってくれました。その言葉に勇気づけられ悩みが小さくなったことが今でも心に残っています。初めて支援センターへ行った頃は、子どもたちとばかり遊び、ママさんたちの名前も知らないお付き合いだったけれど、今では年々下関係なく、同じ親として友達と呼べる仲間ができました。子どもの日々の悩みからなんでも話せる仲間ができてとても居心地がいいです。支援センターの先生方も接しやすく色々話ができ、色々な体験をさせて頂き、とても感謝しています。支援センターで知り会った沢山の出会いを大切にしたいと思っています。



おやつづくり

= 子育て支援センターへの問い合わせ =

- マキノ地域(マキノ児童館内) ☎(27)8187
- 今津地域(今津東保育園内) ☎(22)4833
- 朽木地域(朽木保育園内) ☎(38)2070
- 安曇川地域(古賀保育園内) ☎(33)1540
- 高島地域(高島保育園内) ☎(36)0660
- 新旭地域(大師山さくら園内) ☎(25)3399

子どもをまもる
シリーズ
⑨

知らせぬ勇気 我慢しなご
「子ども虐待防止推進週間」標語募集結果

安曇川中学校3年 柴原向日葵さん

市では、昨年度から子ども虐待問題への関心を持ち、虐待防止の意識を高めてもらうことを目的として、7月1日から1週間を「子ども虐待防止推進週間」と定めて、講演会などの啓発活動を行いました。

今回、その一環として標語を募集したところ、昨年(341人)を大きく上回る671人(内中学生659人)から応募がありました。

作品は、自分自身(子ども)の立場から訴える言葉や、親(大人)の立場に立った言葉など様々。ここに一部を紹介します。

- 「気づいてよ 僕らの小さな メッセージ」
(安曇川中学校3年 北川崇さん)
- 「気づいたら ためらわないで すぐ電話」
(マキノ中学校3年 伊吹葵さん)
- 「抱きしめて 手をさしのべて 寄り添って」
(主婦 上山江利子さん)
- 「ゆるさない しつけという名の 暴力を」
(湖西中学校1年 田中大地さん)
- 「お母さん 悩みをいっぱい ためないと」
(湖西中学校3年 福田寛大さん)

※応募作品は、市ホームページで全作品を紹介しています。ぜひご覧ください。

子ども虐待を無くすための大きな力として「関心を持つ」という力があります。家族や地域のつながりが薄くなればなるほど、子ども虐待が発生しやすい環境は拡大します。

作品から、応募してくださった皆さんの純粋なメッセージが伝わってきました。どうか、子どもの声を聞くこと、地域に目を向けること、そして、おせっかいでも関わりを持つことを始めてください。



現場から
シリーズ
⑬

自分を救けようとする人



不登校や別室登校の児童の情緒安定・教室復帰・学校復帰を支援する目的で、子どもたちと関わるのがスクリーニングケアサポーターである。そんな私は、果たして子どもたちにとってどのような存在なのだろうか。

日々、子どもたちと接する中で、「うるさい」「あっち行って」といった言葉を受けることもよくあるが、その部分だけをかいつまんで、それがその子の全体だと見て取ることは間違っていると思う。時間を共に積み重ねることにより、「こっちへ来て」「隣に座って」と願ってくる。かまってくれないのである。瞬間・瞬間で子どもたちの態度は変化する。シナリオはどこにも無い。時として、子どもたちは孤独感に陥り、だからこそ人としてのつながり合いを求めてくると私は感じている。特別室の前を通る姿が見えるだけで取り乱し、不必要に私に向かってくる子もいる。次の日、アザだらけになった私の腕を見て「これどうしたん?」と聞いてくる。ウンのようだが、その子は自分が何をしたのか覚えていない。

このように、自我に行き詰まった時、私たちが求めるのは自我を受け止めてくれる無私の存在である。私たちは誰も、自分を受けとめてくれる人を探しているはずである。

私は、そんな子どもたちを、絶対肯定できる関わり合いを目指して、今日も彼らの気持ちに寄り添いながら支援を続けている。

(スクリーニングケアサポーター)

※シリーズ「現場から」または本ページのご意見、ご感想をファクスまたは電子メールでお寄せください。ファクス番号は(050)5490、メールのアドレスは kodomo@city.takashima.shiga.jp。